

デザイン・アートを活用した障害者の雇用と生きがいを創生する  
モノ・コト(仕組み)づくり支援

SUPPORT FOR MANUFACTURING AND THE CREATION OF A MECHANISM TO CREATE  
EMPLOYMENT AND REASONS FOR LIVING FOR PEOPLE WITH DISABILITIES  
BY UTILIZING DESIGN ARTS

---

見寺 貞子	芸術工学部ファッションデザイン学科 教授
かわい ひろゆき	芸術工学部ビジュアルデザイン学科 教授
瀬能 徹	芸術工学部ファッションデザイン学科 教授
安森 弘昌	芸術工学部プロダクト・インテリアデザイン学科 准教授
廣中 薫	芸術工学部ビジュアルデザイン学科 准教授
丹羽 真由美	芸術工学部ファッションデザイン学科 実習助手
森下 千春	元・芸術工学部ファッションデザイン学科 非常勤講師

Sadako MITERA	Department of Fashion and Textile Design, School of Arts and Design, Professor
Hiroyuki KAWAI	Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Toru SENOU	Department of Fashion and Textile Design, School of Arts and Design, Professor
Hiromasa YASUMORI	Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Associate Professor
Kaoru HIRONAKA	Department of Visual Design, School of Arts and Design, Associate Professor
Mayumi NIWA	Department of Fashion and Textile Design, School of Arts and Design, Assistant
Chiharu MORISHITA	Department of Fashion and Textile Design, School of Arts and Design, Former Adjunct Lecturer

---

要旨

障害者自立支援法の策定により、障害者施設は、事業収益の拡大や販路開拓が求められ、その対策として、下請け作業やサービス事業、自主製品の製造販売等の活動を行っている。中でも自主製品の製造販売は、障害者の生きがいにはなるが、市場で販売されている商品に比べ、デザインや質、生産・販売体制など、劣っていると云わざるを得ない。

本報告では、デザイン・アートを専門分野とする教員がコーディネーターとなり、障害者施設に対して、今後の社会に求められる価値あるモノ・コト(仕組み)づくりを支援し、障害者の生きがいと雇用を創生する新たな産業構造のモデルとなる事例を示す。

Summary

The Services and Supports for Persons with Disabilities Act calls for increased business revenue and market development at facilities to support people with disabilities, the scope for which includes subcontracted work and services, and the manufacture and sale of original products. The manufacture and sale of such products serves as a powerful motivator for people with disabilities, but we cannot deny that the design and quality of these products, as well as the structures in place to market and sell them, fall short when compared to products for sale on the [commercial] markets. This report outlines how teachers specializing in art and design will act as coordinators to support such facilities in developing products and processes to be valued by society going forward, while citing examples of new models to improve the structure of manufacturing processes, which are to be instrumental in driving the motivation of and creating employment for people with disabilities.

## 背景と目的

障害者自立支援法の策定により、障害者施設は、事業収益の拡大や販路開拓が求められ、その対策として下請け作業やサービス事業、自主製品の製造販売等の活動を行っている。中でも自主製品の製造販売は、障害者の生きがいにはなるが、市場で販売されている商品に比べ、デザインや質、生産・販売体制など、劣っていると云わざるを得ない。しかし反面、障害者にしか表現できない個性的な作品や技術、表現方法などが多数見られ、デザインやアートの専門家から見ると、彼らの持ち得る才能に無限の可能性があると考える。

本研究では、デザイン・アートを専門分野とする教員がコーディネーターとなり、障害者施設に対して、今後の社会に求められる価値あるモノ・コト（仕組み）づくりを支援し、障害者の生きがいと雇用を創生する新たな産業構造のモデル構築となる事例を示す。

### 1. 「REPEAT」（ランプシェード）の開発

担当：プロダクト・インテリア学科 安森 弘昌

神戸光の村授産学園と共同で照明器具（ランプシェード）を考案し、試作品2点を製作した（写真1・2）。



写真1(左)「REPEAT type1」サイズ:W150×D150×H210  
写真2(右)「REPEAT type2」サイズ:W215×D215×H100

ランプシェードは、自由で多様な造形展開が可能で、利用者の個性を形態に反映しやすいアイテムと考え選択した。大学側でデザインと部材加工を行い、神戸光の村授産学園で組み立てて完成する計画を立てた。リズム感のある組み立て作業を考え、モノづくり本来の楽しさや達成感を利用者が実感できるよう心がけた。ひとつのパターンをREPEAT（反復）し、全体を構成する手法で造形し、化粧合板（5mm厚、チェリー、ホワイトアッシュ）から数多くのパーツを切り取り、そ

れを一枚ずつ積み上げて製作する。各パーツは、ズレを抑えかつ確実に緊結するため内部でφ3ボルトナットを使用している（写真3・4）。Type1とtype2の違いは、全体の大まかな形態が円柱形と円錐形である点にある。type1が上端と下端に特殊パーツを使用しその間は同じパーツであるのに対し、type2は、1段ごとに形が少しずつ変化し、全てのパーツに組み立て順序が発生する。学園のそれぞれの作業者がタイプを選択して取り組めるよう製作手順の異なる2点を考案した。



写真3 レーザー加工した合板

パーツの加工には、本学のレーザーカッターを使用した。神戸光の村授産学園のレーザーカッターは、合板切断には出力不足で今回の共同研究では利用できなかったが、設備が揃えば学園内で製作の全過程が遂行可能となる。今回の取り組みが、授産施設のハードとソフト両面での新たな展開につながる契機になればと考える。



写真4「神戸光の村授産学園」での組み立て作業

### 2. アクセサリー制作

担当：ファッションデザイン学科 丹羽 真由美

神戸光の村授産学園と共同で木材を利用したアクセサリーの試作品2点を製作した。アクセサリーとして使用できるようネックレスは、厚さ10mm、イヤリングは3mmの木材を使用した。デザインと柄は本学が提案、神戸光の村

授産学園は、レーザーカッターと糸鋸を利用し、切り抜き作業を行う役割とした。試作を何度も重ね、出来上がったパーツを、本学でアクセサリーへと展開した。柄は「第11回兵庫モダンシニアファッションショー」で、着物のリメイクとコーディネートするアクセサリーとして和柄の渦巻と菱形を考案した(図1・2、写真5)。今回の取り組みから、木材を利用したアクセサリーは、日本の特性を表現するツールのなり得ると思ひ、今後もデザイン提案を続けたいと考える。

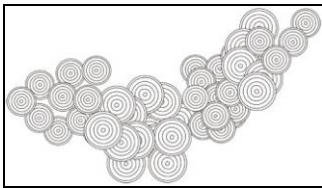


図1 渦巻図案

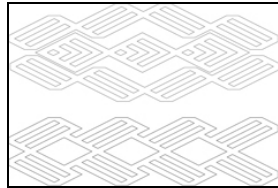


図2 菱形図案



写真5 着物のリメイクとコーディネートするアクセサリー

### 3. 「トゥギャザーマン ビスケット」プロジェクト

担当: ビジュアルデザイン学科 かわい ひろゆき

社会福祉法人かがやき神戸が運営する就労継続支援事業B型「コミュニティカフェ Rico (りこ)」と「くろ～ばあ」の2カ所で販売する珈琲や紅茶などの飲み物とクッキーをセットにしたメニューをより魅力的にし、顧客満足度を上げることを目標に企画・実施した(写真6)。時期的にバレンタインを意識して通常は丸いクッキーを2つに切っているものを、人と人の想いをつなぐをコンセプトにかわいがデザインしたキャラクター「トゥギャザーマン」形にすることで、好感度アップ

を図った(写真7～13)。クッキーは、同グループの多機能型「なでしこの里」の工房で生産しているが、バター含有量が高いため型崩れしやすく、トゥギャザーマンの形を保つのが難しい。また、作業の都合上1週間分まとめてつくらざるを得ないが、そうするとバターが酸化してしまうという事情もあり、日持ちするビスケットにすることになった。カフェでの提供は、Ricoが2月8日(月)～13日(土)、くろ～ばあが2月24日(水)～27日(土)に行き、同時にアンケート調査を実施した。アンケートはRicoが39名、くろ～ばあが59名、総数98名の方の協力が得られた。アンケートの設問は、①トゥギャザーマンビスケットはかわいいと思うか、②セットでなくビスケットだけでも注文したいか、③キャンペーンをしてほしいかの3項目で、それぞれ5段階評価で回答を得た。結果は、①トゥギャザーマンビスケットはかわいいと思うかに対して、思う72名、まあまあ15名、普通7名、あまり思わない3名、思わない1名。②ビスケットだけでも注文したいかに対して、したい48名、まあまあ9名、普通26名、あまりしたくない13名、したくない2名。③キャンペーンをしてほしいかに対しては、してほしい65名、まあまあ16名、普通12名、あまりしてほしくない4名、してほしくない1名、となった。



写真6 Rico 外観



写真7 トゥギャザーマンビスケット



写真8 型紙



写真9 型枠



写真10 ビスケット製作1



写真11 ビスケット製作2



写真12 ビスケット製作3



写真13 試行錯誤

今回のプロジェクトは工房の生産体制の都合から期間限定で実施したが、概ね好評であったと考える。今後、飲み物とのセットだけでなくビスケット単体の商品開発も可能性があると考えます。

#### 4. 「参加型アート」としての「写メコーナー」制作と設置 担当：ビジュアルデザイン学科 廣中 薫

神戸市の総合福祉ゾーンしあわせの村(神戸市北区)で開催された「平成27年度ユニバーサルデザインフェア」(2016年3月20日)で見るだけのイベントでなく参加することで、本人(全員)が主役となる参加型アートを、現代的な「写メ」という現在誰もが持参する携帯カメラ機能を活かして「写メコーナー」を設置した。自分が主役となり写メに収まることで存在感を強調し再認識する。家族で見せ合う。記録に残す。写メで発信し、第三者までに伝える楽しさ。「自分の或る風景」(写真=記録)の共有感覚。自分が参加した瞬間から「自分を発信する装置」として多様な方向へ向かう。今回は、のぞき穴へ人が顔を出すことで絵が完結となる大きなイラストレーションの描かれた看板を制作し設置した(写真14)。看板に描かれた絵による合成・簡易的・瞬時の変身は、思いがけず日常と非日常の線を越えた二次元世界へ誘い、おかしみ迄も生じ、エンターテイメント的なアート装置でもある。今回のテーマは「車椅子のまま写メツール」。看板に描かれた車椅子の絵。健常者も車椅子状況の自分の姿となり、記録されることでUD(ユニバーサルデザイン)への距離が身近に考えられ、

共有することで健常者として障害者への心ある振る舞いが可能となる。デザインの工夫として実験的に穴を2つ開けた。ひとつは健常者の大人が普通に立って顔を出す高さ。もうひとつは車椅子のまま顔を出せる高さにし、健常者は顔を出すことでそれぞれの状況が体験でき、瞬時・簡単に「変身状況」を作り上げることができる。気持ちが寄り添うことのできる装置でのUD体験は、互いを思いやる未来のUD環境の構想にやがて結びつくものと考えます。



写真14 「参加型アート」としての「写メコーナー」  
写真15 (左下) 野村亜也子さんディレクション作品

※図・写真はいずれも筆者作成・撮影

展示では、障害者アートへの新たな試みとして障害のあった故野村亜也子さん(小児癌で死去、絵を描くことが楽しみでアーティストになることが夢だった)のアート作品をディレクションし提案した(写真15)。デザインを通じて、彼女の世界を再現し、量産し、故人の質・品格を保ち、気持ちを伝える、個人を尊ぶことを発信したい。

本学はこれまでも、デザインやアートと障害者に関する数々の調査研究を行なっている。今後も、分野を広げて、デザインやアートを活用した障害者の雇用と生きがいを創生するモノ・コト(仕組み)づくり支援を進めていきたい。